

2つの寄生空所構文における派生的違い

黒木, 隆善
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6790825>

出版情報 : 九大英文学. 48, pp.125-146, 2005. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :



2つの寄生空所構文における派生的違い*

黒木 隆善

1. はじめに

英語には、寄生空所構文(Parasitic Gaps: 以下 PG)という文法現象がある。

(1) Which article did John file *t* without reading *pg*?

(1)を見ても分かるとおり、WH句である **which article** が **file** の目的語位置から移動した際、その移動に寄生するように付加詞である **without reading** の中にも空所ができる現象である。

興味深い事に、PG は付加詞の中だけでなく、主語の中にも現れることができる。従来、この 2 つの PG は同じ現象である、と考えられていたため、PG の統一的な分析が一般的となっている。中でも最近の分析では、Nissenbaum(2000)や、Nunes(2004)において、統一的分析が試みられている。しかしながら、付加詞に生起する PG と主語に生起する PG の特徴を詳しく見ていくと、2 つの PG 現象に対する束縛原理 A と束縛原理 C に関する文法的判断が全く正反対になっているという事実と直面し、そのため、それぞれの分析において問題が出てくることが分かる。

本論文では、付加詞に生起する PG と主語に生起する PG にみられる特徴の違いに着目し、そもそも付加詞に生起する PG と主語に生起する PG では、全く別のメカニズムが働いた結果、見た目上、同じ形に見える結論付ける。その際、先行研究でとりあげる Nissenbaum(2000)の Late Merge の概念と述部修飾、Nunes(2004)の Copy + Merge 理論に基づく、島の概念と Sideward Movement という、一見相反する分析が、それぞれの PG 現象に対して独自に必要な、ということを示し、それを使った代案を提示する。

更に、二重目的語構文における間接目的語からの抜き取りと、直接目的語からの抜き取りの非対称性に関して、Nunes(2004)の島の概念を使い、(Multiple) Spell-Out による説明を試みる。

2. 事実と問題

英語における PG は、次の(2)が示すように、寄生空所の生起位置によって、付加詞寄生空所(Adjunct Parasitic Gaps: 以下 APG)と主語寄生空所(Subject Parasitic Gaps : 以下 SPG)に分類される。

(2) a. Which book_i did John file *t*_i [without reading *pg*l]?

b. Which book_i did [every boy who read *pg*l] say Mary liked *t*_i?

(2a)が APG であり、(2b)が SPG である。Engdahl(2001)、Chomsky(1986a)によると、これらは両方とも *wh* 移動や関係節、話題化などの A'移動に伴って生じ、(3)のように、真の空所(Real Gap : 以下 RG)が PG を c-command してはならないことや島の制約を示すこと等が示されている。

(3) a. *Which articles_i *t*_i got filed by John without him reading *pg*l?

(Engdahl(2001))

b. *?This is a man_i I interviewed *t*_i before asking you which job to give to *pg*l?

(Chomsky(1986a))

これまで、この APG と SPG は同じ寄生空所構文の例として考えられ、2つの PG の統一的な分析が試みられてきたが、2つの PG 現象を詳しく見ていくと、APG と SPG における明らかな違いが生じてくる。

(4) a. *Which pictures of himself_i did Mary sell *t*_i [before John_i had a chance to look at *pg*l]?

(Nissenbaum(2000))

b. Which pictures of himself_i did John_i sell *t*_i [before Mary had a chance to look at *pg*l]?

(ibid)

- (5) a. Which picture of himself_i did [every boy_i who saw *pg*] say Mary
liked *t*? (Munn(1994))
b. *Which picture of herself_i did [every boy who saw *pg*] say Mary_i
liked *t*? (ibid)

(4)(5)はどちらも束縛原理 A に関するテストである。APG の例である(4)の対比から、*Which pictures of himself*に含まれる *himself*は PG の位置には再構築せず、RG の位置に再構築する、ということが予測される。しかしながら、SPG の例である(5)の対比をみても、その予測とは全く正反対の結果がでてしまう。

再構築に関する違いは、束縛原理 C のテストでも現れる。

- (6) a. *Which picture of John_i did he_i buy *t* [without letting Mary look at
pg]? (Nissenbaum(2000))
b. Which picture of John_i did Mary buy *t* [without letting him_i look at
pg]? (ibid)
c. Which picture of John_i did [every boy who saw *pg*] say he_i liked *t*?
(Kondo(2000))

(6a, b)における APG の対比から、WH 句は RG の位置にのみ再構築を行い、付加詞内には WH 句が再構築しない、ということが予測できる。しかしながら、その WH 句が RG の位置に再構築する、と考えてしまうと、SPG である(6c)にも束縛原理 C 違反が生じるはずであるが、事実はそうではない。

以上のような例を考慮すると、同じ寄生空所構文という文法現象としてまとめられている APG と SPG が、本当に統一的なメカニズムで捉えられるかどうか疑問になってくる。

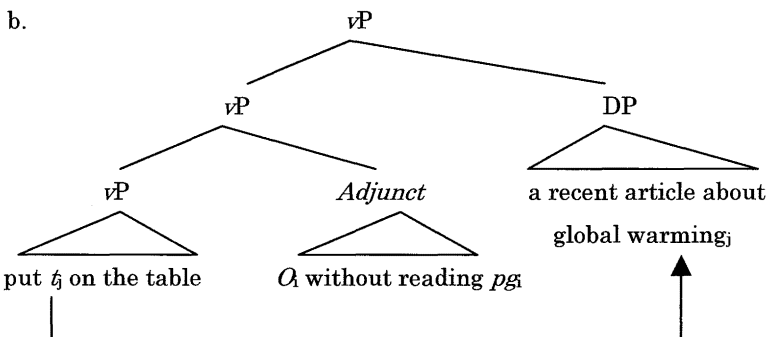
3. 先行研究

PG の統一的な説明として、大きく分けて2つの分析方法が試みられている。1つは空演算子による分析であり、もう1つは連続循環移動による分析

である。

Nissenbaum(1998)(2000)では、空演算子による分析を採用している。

(7) a. John put on the table without reading a recent article about global warming.



Nissenbaum は重名詞句移動が PG を認可することから、(7a)の例が(7b)のように派生していくと考えている。まず、最も下位にある vP から vP-Spec への DP の移動があり、その後空演算子の移動を行った付加詞が Late Merge する、と考えている。Nissenbaum は、最も下位の vP と付加詞は Heim and Kratzer(1998)で提案された λ 抽象化を行うと考え、意味部門において述部修飾を行うことで APG を処理している。述部修飾とは、 λ 抽象化された 2 つの要素の意味を解釈できるように合成する操作である。¹

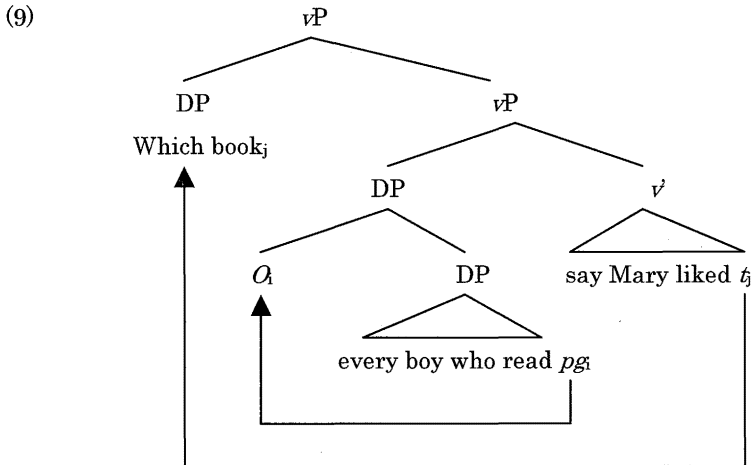
Nissenbaum(2000)は、この付加詞内での空演算子移動と、Late Merge 後における vP と付加詞の述部修飾を支持する証拠として(8)のデータを提示している。

- (8) a. *Which pictures of himself_i did Mary sell *t* [before John_i had a chance to look at *pgl*? (=4a)
- b. *Which picture of John_i did he_i buy *t* [without letting Mary look at *pgl*? (=6a)

- c. Which picture of John_i did Mary buy *t* [without letting him_i look at *pg*]? (= (6b))
- d. Which picture of his mother did you give *t* to every Italian [after buying *pg* from Mary]? (Nissenbaum(2000))
- e. #Which picture of his mother did you give *t* to Mary [after buying *pg* from every Italian]? (ibid)

もし、連続循環的な移動が可能であれば、付加詞部分からの抜き出しが可能であるため、PGの位置に *copy* が残っているはずであり、それゆえ(8a)は文法的になり、(8c)に関しては非文法的を予測してしまうはずである。

しかしながら、Nissenbaum(2000)における空演算子分析をSPGに応用すると、問題が生じてくる。(2b)を例にして考えてみる。Nissenbaum(2000)の理論に基づき、(2b)の主語内に空演算子の移動があると仮定すると、*vP*内は(9)のようになる(*v*内部は省略)。まず、SPGの場合、主語は付加詞のように修飾要素ではなく、項であり、そもそもLate Mergeも行わないので、先述のAPGで行ったような述部修飾は行えないはずである。



更に、WH句の再構築を示す(5)や(6c)の文法性が説明できないことも問題で

ある。Nissenbaum(2000)では付加詞における空演算子の移動の正当性を示す証拠として、束縛原理 A、束縛原理 C、Variable Binding の文法性を使い、(8)のデータを提示している。しかしながら、同じ束縛原理 A、束縛原理 C のテストを SPG に行った(5)や(6c)のデータは、(8)の文法性とは全く正反対になっていることから、逆にこのデータがそもそも空演算子の移動ではない、ということを示す証拠になってしまうのである。

以上のことから、Nissenbaum(2000)における PG の空演算子分析は、APG に関しては妥当な説明ができるが、SPG に関しては問題解決に至っていない。

次に、連続循環移動による統一的 PG 分析を検証する。Nunes(2001)(2004)では、Move という操作の余剰性を指摘し、Move は Copy、Merge、Form Chain、Chain Reduction という 4 つの基本的な操作の結果であると主張している。この Copy + Merge 理論を基本として、Sideward Movement を仮定し、PG を説明している。

(10) a. Which picture did you file without reading?

b. $N = \{\text{which}_1, \text{paper}_1, Q_1, \text{you}_1, \text{did}_1, v_2, \text{file}_1, \text{without}_1, C_1, \text{PRO}_1, T_2, \text{reading}_1\}$

Nunes(2004)では、(10a)の Numeration である(10b)の状態からまず Lexical item を取り出し、2 つの構造(11b)(11c)を派生する。そのとき、Numeration 内は(11a)になる。

(11) a. $N' = \{\text{which}_0, \text{paper}_0, Q_1, \text{you}_1, \text{did}_1, v_1, \text{file}_0, \text{without}_0, C_0, \text{PRO}_0, T_1, \text{reading}_0\}$

b. $K = [\text{CP } C [\text{TP } \text{PRO}_j [\text{T } T [\text{vP } t_j [\text{v } v [\text{VP } \text{reading } [\text{which paper}]]]]]]]$

c. $L = \text{file}$

(11b, c)を派生した後、残りの Numeration(11a)を使って更に派生を進め、収束せなければならぬのであるが、その際、(11a)の中身だけを使って派生を行うと、動詞 *file* の意味役割が放出されないため、結果的に派生が破綻し

- (12)の派生の後、(11a)の Numeration からそれぞれの Lexical item を取り出して、派生が(13a, b)の状態まで進んだ後、(13a)を(13b)に Merge し、(13c)を派生する。その後派生を進める事で、概略、次の(14)の構造を派生し、Spell-Out される。

- Spell-Out 後に、(14)は音声部門に送られるのだが、そのとき、c 統御関係から、最も上位の Copy と RG 位置の Copy との Chain と、最も上位の Copy と PG 位置の Copy との Chain という 2 つの Chain が形成される。² それぞれは別々の Chain として考えられるので、Chain Reduction に基づき、それぞれの Chain の末尾(tail)が削除される。³ Nunes(2004)ではこのようにして、1 つの Operator に対し 2 つの空所ができる構造を説明している。SPG に関しても同じように、Sideward Movement を使い、説明できる。

(15) a. Which book_i did [every boy who read pg_i] say Mary liked _t? (= (2b))

b. K = [who read [which book]_i]

c. L = liked

(16) a. K = [who read [which book]_i]

b. M = [liked [which book]_i] (*Sideward Movement*)

(15a)の派生は、(15b, c)の段階で、動詞 like の意味役割における要請から *which book* を Copy し、その Copy が主節の Spec-CP まで移動すると、APG と同様の過程を経て Chain を作ることができ、その結果 SPG ができる。

このように、Nunes(2004)では空演算子を使わない分析を試みているが、しかしながら、Nissenbaum(2000)において、空演算子移動の根拠としていた(8)の例が説明できない。

以上、2つの先行研究を概観してきた。どちらも統一的な説明をしている一方、Nissenbaum(2000)の分析を採用すると、(5)や(6c)といった SPG における文法性を説明できず、また Nunes(2004)の *Sideward Movement* を採用すると、Nissenbaum(2000)で示されている(6)の文法性が説明できなくなる。

本論文では、この(5)(6c)と(8)との文法性の違いを、SPG と APG のメカニズムの違いに還元する。そのため、本章で提示した Nissenbaum(2000)と Nunes(2004)における分析の一部を使い、代案を提示していく。その結果、APG と SPG がもともと別のメカニズムから派生しており、派生が進んだ結果、見た目の上では同じ形になっていることを結論付ける。

4. 代案

4. 1. 空演算子の有無に関する経験的証拠

前章では、空演算子の移動がある分析と、無い分析を概観し、それぞれの分析において問題があることを指摘した。そこで、本セクションでは、SPG と APG に関して、それぞれに空演算子の移動が存在するのか否かについて最初に議論していく。

Emonds(2001)では、次のようなデータ提出している。

- (17) a. *Which one did Bill encourage *t* without saying [_{CP} where he would publicly support *pgl*?] (Emonds(2001))
 b. ?Which guest did Bill criticize *t* while recalling [_{CP} that Sue had supported *pgl*?] (ibid)

このデータは、どちらも CP 節内に PG を持つ例であるが、(17a)は明らかな非文法性を示しているのに対し、(17b)は(17a)よりも容認性が高くなっている。APG の例である(8)のデータも考慮に加え、空演算子は適切な解釈を受けるために、PG の位置から付加詞節の先頭位置まで、付加詞内に埋め込まれた Spec-CP 位置を経由して移動すると考えると、前者の場合は埋め込み節内の Spec-CP 位置が *where* で埋まっているために Chomsky(1995)における最小連結条件(Minimal Link Condition : MLC)の違反を引き起こしており、後者の場合は少なくとも MLC の違反が回避されているために容認性が高くなっている、と考えられる。

一方、SPG の例である(18)をみると、Spec-CP は確かに関係節の *who* で埋まっているはずであるが、MLC の違反は生じていない。

- (18) Mary is one person that [everyone [_{CP} who talks to *pgl*] seems to admire *t* tremendously. (Nissenbaum(2000 : 96))

もし、空演算子の移動があり、それが Spec-CP へを介して行われるのであれば、(18)にも同じ非文法性が生じるはずである。従って、SPG の主語内には、少なくとも空演算子の移動が無いと結論付けられる。

以上のことから、2つの PG には空演算子の移動の有無に関して明らかな違いが生じていることが分かる。SPG に空演算子の移動が無く、APG には逆に空演算子の移動が存在するということは、それぞれの PG 現象に対して別々の認可のメカニズムが必要であるということを意味している。

4. 2. 先行研究の再考

前セクションでは、2つのPG現象における、空演算子の移動の有無を経験的な事実から導き出した。本セクションでは、その事実をもとに再度先行研究を検証し、それぞれの分析の一部分が、文法において独自に必要とされている、ということを論じていく。

まず、SPGにおける分析を比較検討していく。Nissenbaum(2000)の場合は先述のように、空演算子の移動を主語内に仮定しているが、前セクションでの経験的証拠から、空演算子の移動は想定できない。

よって、空演算子の移動を想定しない場合、3つの理論的可能性が考えられる。(i)PG、RG両方とも同じWH句で、ATBの移動と同じように2箇所から一度に抜き取る。(ii)もともとWH句はRGの位置にあって、それが主語内のPG位置にCopyされ、更に最も高位のSpec-CPへと移動する。(iii)WH句はもともと主語内のPG位置にあって、それが主動詞の目的語位置、つまり、RGの位置へとCopyされ、それがSpec-CPへと移動する。(i)の可能性を想定した場合、先述の(5)(6c)が説明できなくなる。(5)(6c)の例において、同じWH句がPGにもRGにもあり、その2箇所から一度に抜き取るのであれば、そもそも束縛原理A、束縛原理Cにおける文法的な違いは出てこないはずである。Copy理論に基づき(ii)の可能性をとると、この移動は一度主語内を通してSpec-CPに移動する、ということになるので、主語の島に違反することになる。そうすると、必然的に残るのは(iii)の可能性である。この場合、(ii)と同様、主語の島に違反する可能性を孕んでいるが、Nunes(2004)のSideward Movementの考えを使うと解決できる。Nunes(2004)によると、SPGは一般的に前章の(15)(16)の過程を経るため、主語がvPにMergeする前にCopyを行うので、主語の島には違反しない。Nunesによると、主語の島違反になるのは、次の(19)のような派生を経たときである。

(19) a. *Which politician did pictures of upset the voters?

b. [CP [which politician]ⁱ did + Q [[pictures of [which politician]ⁱ] upset the voters]]

- c. K = [_{DP} pictures of [which politician]ⁱ]
- d. L = [_ν ν [_{VP} upset the voters]]
- e. M = [_{νP} [_{DP} pictures of [which politician]ⁱ] [_ν ν [_{VP} upset the voters]]]

(19)において、最初の Numeration の段階から(19c)と(19d)まで派生が進んだとき、KがLに対してCopyする理由が特に無いので、KとLは何の問題も無くMergeし、(19e)である、Mを形成する。そのときにKは複雑な主語となり、Kayne(1994)における線形一致の公理 (Linear Correspondence Axiom : LCA) を満たせなくなる事から、それを回避するため Uriagereka(1999)で提案された (Multiple) Spell-Out が主語に適用し、主語は音声部門(と同時に意味部門)へと送られる。⁴ その結果、計算体系 (Computational system) は主語内部にはアクセスできず、主語が島を形成すると説明している。一旦島が形成されると、そこからの抜き出しは許されないので、島の中から無理やり抜き出した(19a)は非文法的になるのである。以上のことを踏まえると、(ii)の可能性を支持した場合、RGの位置から主語内のPG位置へとCopyをかけてしまうと、その主語は(19c-e)と同様の過程を経てしまうことになるので、SPGを誤って非文法的であると予測してしまうのである。逆に(iii)を支持した場合は、主語が島を形成する前にRGの位置へWH句をCopyするので、主語の島違反をしないと予測でき、事実を正しく捉える事ができる。

この Sideward Movement を使うことにより、全域的適用構文(ATB構文)にも同様の説明ができる。ATB構文とは、次の(20a)のような文を指す。

- (20) a. Which paper did John file and Mary read?
- b. *Which paper did John file and Mary read this book?
- c. *Which paper did John file this book and Mary read?

Nunes(2004)の Sideward Movement の分析を応用すると、*file*の目的語位置から、*read*の目的語位置の意味役割を満たすためにWH句をCopyし、そのCopyがSpec-CPまで移動して、Spell-Outされて音声部門に送られた後、

c 統御関係から最も上位の *Copy* と *file* の目的語位置の *Copy* との *Chain* と、最も上位の *Copy* と *read* の目的語位置の *Copy* との *Chain* という 2 つの *Chain* が形成され、それぞれの *Chain* が *Chain Reduction* の適用を受けて、(20a) が生成される、と説明できる。逆に (20b, c) は、等位構造における独自の要請 (*Parallelism Requirement*) を満たしておらず、*Copy + Merge* 理論における *Last Resort* の原則に違反するため、非文法的になる、と説明づけることができる。(因みに (20a) はその要請を満たしている。)

次に、APG に関して再考していく。Nunes(2004) の *Sideward Movement* を仮定したときに、(8) が説明できないという問題がでてくることは先に議論したとおりである。更に、Nunes(2004) における *Sideward Movement* 分析には、次のような問題がある。

(22) a. Who did you praise *t* to the sky [after criticizing *pgl*] [in order to surprise him]?

b. *Who did you praise *t* to the sky [after criticizing him] [in order to surprise *pgl*] (Nissenbaum(2000))

この (22b) を、Nunes(2004) の分析で考えてみると、その過程は (23)(24) のようになるはずである。

(23) a. K = [after criticizing him]

b. L = [in order to surprise [who]_i]

c. M = praise

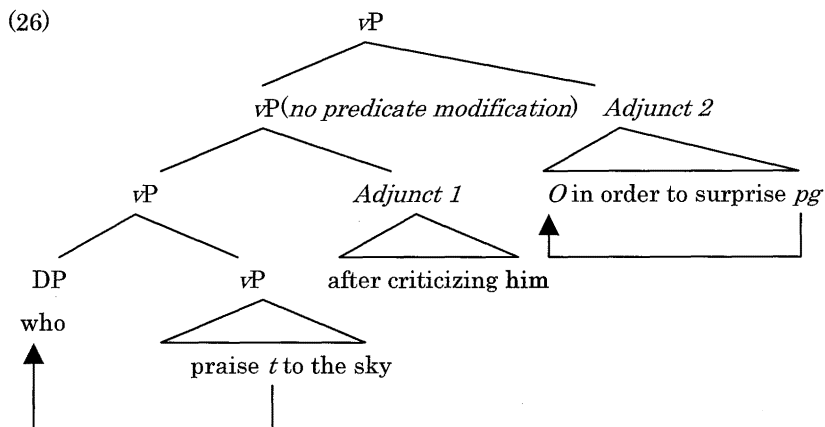
(24) a. K = [after criticizing him]

b. L = [in order to surprise [who]_i]

c. P = [praise [who]_i]

(24c) の派生の後、(24a) の K が Merge し、更に (24b) の L が Merge するのであるが、その際 (23)(24) にみられる K と L はそれぞれ別の付加詞であるから、

順的に空演算子移動のない *Adjunct 1* が先に Merge するので、最も下位の *vP* は述部修飾を行わない。その後 *Adjunct 2* が Late Merge しなければならないが、最も下位の *vP* が述部修飾を行わなかったので、結局 *Adjunct 2* とも述部修飾を行えなくなる。



このように、Sideward Movement で説明不可能なこれらの APG の例に対し、Nissenbaum(2000)の分析では、付加詞の Late Merge と、述部修飾の履行可能性によって説明できる。さらに、付加詞内における空演算子により、そもそも付加詞からの抜き取りが不可能である、ということを示す(8)の例も説明がつく。

この述部修飾による APG の分析は、単に APG だけでなく、他の空演算子の移動による分析にも必要である。

- (27) a. I found Mary easy [*O* to appreciate *t*]
 b. Gertrude is too stubborn [*O* to disregard *t*]
 c. Cool Hand Luke ate more eggs [*O* than they were able to boil *t*]
 (Nissenbaum(2000))

(27c)を例にとると、空演算子の移動のある部分[*O* than they were able to

boil Ⅲ] (修飾部)と先行詞(被修飾部)である *more eggs* は、それぞれⅢ抽象化を行い、意味部門において述部修飾が行われ、2つの一項述語が合成される。

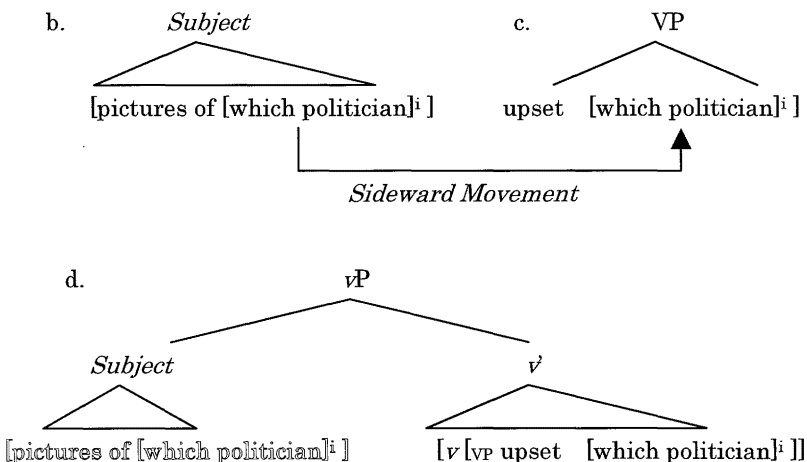
以上 2 つの分析の詳細を検証した結果、Nunes(2004)の *Sideward Movement* による分析は、Nissenbaum(2000)では理論的に不可能であった SPG の他にも島の効果や、ATB 構文を説明するのに最適な分析であり、なおかつ、Copy + Merge 理論により痕跡の存在が明らかになることがわかり、逆に Nissenbaum(2000)の分析は、空演算子の移動一般に独自に必要な分析であることが結論付けられる。次節では、これまでの結論をもとに、SPG と APG のメカニズムの違いを明らかにしながら、代案を提示する。

4. 3. 代案

前節での、Nunes(2004)と Nissenbaum(2000)の細部にわたる吟味の結果をもとに、本節では、SPG と APG の派生方法を説明し、2つの寄生空所構文はそもそも異なったメカニズムにより生じている、ということを示す。

まず、SPG に関して考察していく。SPG の場合、主語内に WH 句があり、それが V 内に Copy されて、Spec-CP まで移動していく。

(28) a. Which politician did [pictures of *pg*] upset *t*?



(28a)はまず、(28b)である主語となる句を形成し、その後、(28c)内にある動詞 *upset* の意味役割を満たすために、*which politician* の Copy を行う。そのとき、主語内の WH 句と VP 内の WH 句には、c 統御関係は生まれない。主語は *vP(v)* と Merge する前に、(Multiple) Spell-Out をかけられ、音声部門と意味部門に送り出される。それを表したのが、(28d)である。この後、VP 内の WH 句は *vP* へと付加し、cyclic に Copy と Merge を繰り返しながら派生を進め、WH 句は Spec-CP へと移動する。WH 句の Spec-CP への移動後、全てが PF へと送られた段階で、Chain Reduction を適切に行い、その結果 (28a)が生成される。その際、Spec-CP と主語内にあった WH 句は、c 統御により適切な Chain を形成しているため、Operator-Variable の関係にある。よって、再構築現象が見られた、(5)や(6c)の例が説明できる。その対比を次の(29)に繰り返してある。

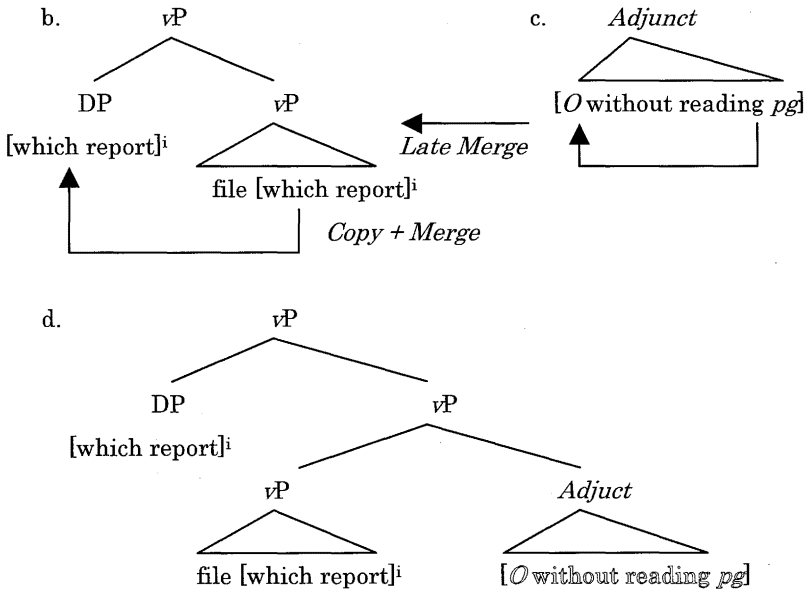
- (29) a. Which picture of himself_i did [every boy_i who saw pg] say Mary liked t?
 (= (5a))
- b. *Which picture of herself_i did [every boy who saw pg] say Mary_i liked t?
 (= (5b))
- c. Which picture of John_i did [every boy who saw pg] say he_i liked t?
 (= (6c))

(29a, c)に関しては先述の Sideward Movement により説明できるが、(29b)に関しては問題が残ると思われるかもしれない。なぜなら、Sideward Movement により、Spec-CP と主語内の PG 位置に Chain が形成されるのと同じように、Spec-CP と主動詞の目的語位置、即ち RG 位置とも Chain を形成しているはずであるからである。しかしながら、これは問題にならない。なぜなら、主語が Merge する前に、複雑な主語は(Multiple) Spell-Out され、音声部門と意味部門に送られるからである。解釈に送られると、*self* 形はその時点で解釈されるため、たとえ RG 位置に Copy をしたとしても、その Copy には *self* 形を更に解釈する必要がない。(29b)の場合、主語内の *herself* は、主語が Merge したときに解釈に送られ、その時点で適切に認可されねばなら

ないが、every boy による認可ができない。また、WH 句を RG 位置に Copy したとしても、先に主語位置が解釈に送られるために、RG 位置での self 形の解釈はなされないため、非文法的になる。⁵

次に、APG を考察していく。APG の場合、SPG と決定的に違う点は、付加詞内に空演算子の移動がある、という事実である。

(30) a. Which report did John file *t* [without reading *pg*]?



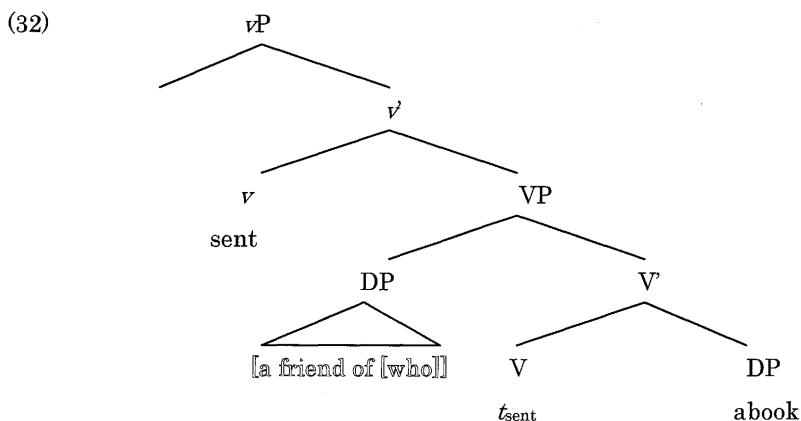
(30d)の派生の後、意味部門においてそれぞれが抽象化を行い、最も下位の *vP* と付加詞が述部修飾を行って、PG が適切な解釈を受ける結果、(30a)が派生される。この派生により、SPG と対照的であった(8)に関するデータが説明できる。付加詞内の PG はもともと空演算子の移動であるため、述部修飾による解釈は適切に受けるが、移動する WH 句との Operator-Variable 関係はないので、SPG に現れるような束縛原理 A、束縛原理 C のテストの結果とは、全く逆の結果が生じるのは当然のことなのである。

5. 二重目的語構文

本章では、前章で取り扱った(Multiple) Spell-Out をもとに、二重目的語構文における島の制約に関して議論していく。二重目的語構文において、次の(31)のようなデータがある。

- (31) a. *Who did you say John sent [a friend of *t*] a book? (Oba (2005))
 b. Who did you say John sent me a picture of *d*? (ibid)

(31a)は間接目的語からの抜き取りであり、(31b)は直接目的語からの抜き取りである。それぞれの構造を派生的に考えると、(31a)は次の(32)のようになる。



(32)を見ると分かるように、間接目的語である [*a friend of t*] は、VP 内の指定部位置にあり、Nunes(2004)における島の分析と同じく、そのまま Merge してしまうと Kayne(1994)における LCA を満たせなくなるため、それを回避するために、Merge する前に Uriagereka(1999)の(Multiple) Spell-Out を間接目的語位置に適用し、解釈に送り出してしまふ。(32)における間接目的語内の WH 句は、Merge する前に特に意味役割を満たすための Sideward Movement の必要がないので、(Multiple) Spell-Out がそのまま適用され、

その結果、間接目的語の内部には計算体系がアクセスできず、派生が収束しなくなるのである。逆に(31b)に関しては、直接目的語は LCA を満たしているので、Copy + Merge 理論に則り、最も上位の Spec-CP まで移動可能である。

6. まとめ

本論文では、APG と SPG という 2 つの PG 現象に対し、議論を進めてきた。そのなかで、APG と SPG では再構築に違いが出ることを問題としてとりあげ、PG の統一的な研究では解決できないことを示した。そこで本論文では、APG と SPG における派生のメカニズムがそもそも異なっており、それが偶然同じ形をしていると考え、それぞれの派生に対して、従来の先行研究をもとに解決を試みた。更に、Nunes(2004)における分析を使うことにより、二重目的語構文に現れる島の非対称性に関しても説明できることを示した。

註

- * 本論文作成に関して、西岡宣明先生から、示唆に富む大変有益なご指摘をいただいた。特記して感謝の意を表したい。また、本稿の内容や例文に関する不備はすべて筆者の責任である。

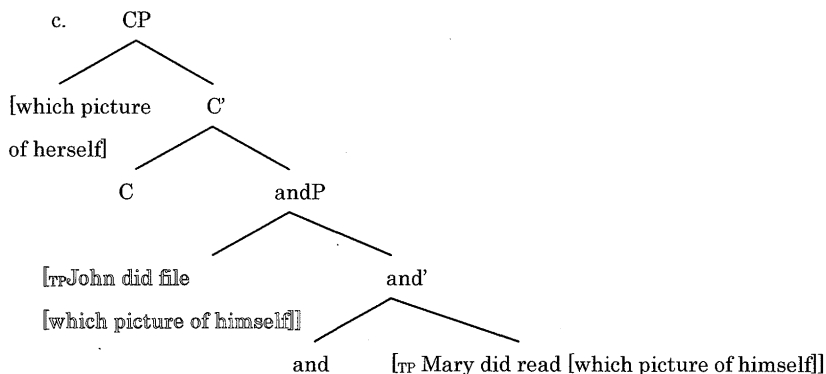
1. Nissenbaum(2000)では、PG の述部修飾を次のように説明している。本文中の(7)の例において、まず、最も下位の vP は、その中から DP である [a recent article about global warming] を移動した際、 λ 抽象化が行われ、次の (i) という述部を形成し、空演算子の移動がある付加詞 [*O* without reading *pg*] に関しても、同じように λ 抽象化が行われ、(ii) の述部を形成する。

(i) $\lambda x. \lambda e. e$ is a putting of x on the table by John

(ii) $\lambda x. \lambda e. \text{There is no } e', e' \text{ an extended event that includes } e \text{ as a subpart, such that } e' \text{ also includes a reading of } x \text{ by PRO}$

その後、意味部門において、 λ 抽象化同士は述部修飾を行い、(iii) のように合成される。

- (iii) $\lambda x. \lambda e. e$ is a putting of x on the table by John and $\lambda x. \lambda e. \text{There is no } e',$
 e' an extended event that includes e as a subpart, such that e' also includes
 a reading of x by PRO
2. Chain の形成に関して、Nunes(2004 : 91)は次のような Chain 形成の条件を提案している。
- Chain 形成の条件(Nunes(2004)) : Chain $CH(\alpha, \beta)$ は次のとき形成される。
- α と β が nondistinct(区別がないもの)である。
 - α が β を c 統御する。
 - 最後の手段に従う。
 - 最小連結条件に違反しない。
3. Chain Reduction の定義は以下のようなものである。(cf. Nunes(2004 : 27))
- Chain Reduction : 線形一致の公理(Linear Correspondence Axiom : LCA)に従い、
 nontrivial な chain 内の最少数の構成をを消しなさい。
- また、LCA の定義は以下のようなものである。(cf. Kayne (1994 : 33))
- 線形一致の公理 : X, Y は末端ではなく(nonterminal)、 x, y は X, Y それぞれに
 支配されている末端(terminal)であるとする。そのときもし、 X
 が Y を非対称的に c 統御しているのであれば、 x は y に先行する。
4. Uriagereka(1999)での Multiple Spell-Out は、複雑な指定部位置を音声部門のみに送り出す操作であるとしていたが、本稿では、Lasnik and Uriagereka(2005)でも指摘されているように、Multiple Spell-Out は音声部門と同時に意味部門にも送り出されるという考えを採用する。
5. Sideward Movement による分析は、ATB 構文における再構築の次の対比にも応用できる。
- (i) a. *Which picture of herself did John paint t and Mary buy e' ?
 b. Which picture of himself did John paint t and Mary buy e' ?



Spec-andP 位置の TP は Merge する前に(Multiple) Spell-Out が適用されるので、先に音声部門と意味部門に送られてしまい、self形はその時点で解釈されてしまうため、(i b)のみが文法的であると正しく予測できる。

参考文献

- Chomsky, N. (1986a) *Barriers*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Emonds, J. (2001) "The lower operator position with parasitic gaps", In *Features and interfaces in Romance*, ed. by Julia Herschensohn, Enrique Mallén, and Karen Zagona, 85-106. Amsterdam.: Benjamins.
- Engdahl, E (2001) "Parasitic Gaps", In *Parasitic Gaps*, ed. by Peter W. Culicover and Paul M. Postal, 69-97. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Heim, I. And A. Kratzer (1998) *Semantics in generative grammar*, Oxford.: Brackwell.
- Kayne, R. (1994) *The antisymmetry of syntax*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kondo, M. (2000) "Subject Parasitic Gap Constructions and Decomposition of Wh-Movement", In *Linguistics and Philology 19: Synchronic and Diachronic Studies on Language: A Festschrift for Dr. Hirozo Nakano*, ed. by Masachiyo Amano, Toshiya Tanaka, Masayuki Ohkado, Miho Nishio, Makoto Kondo, and Tomoyuki Tanaka, 131-145. English Linguistics

Department, Nagoya University.

- Lasnik, H. and Uriagereka, J. (with Cedric Boeckx) (2005) *A Course in Minimalist Syntax: Foundations and Prospects*, Oxford.: Blackwell.
- Munn, A. (1994) "A Minimalist account of reconstruction asymmetries", In *Proceedings of NELS 24*, 397-410. GLSA, University of Massachusetts, Amherst.
- Nissenbaum, J. (1998) "Movement and Derived Predicates: Evidence from Parasitic Gaps", *MIT Working Paper in Linguistics* 25, 247-295
- Nissenbaum, J. (2000) *Investigations of Covert Phrase Movement*, Doctoral Dissertation, MIT.
- Nunes, J. (2001) "Sideward Movement", *Linguistic Inquiry* 32, 303-344.
- Nunes, J. (2004) *Linearization of Chains and Sideward Movement*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Oba, Y. (2005) "The Double Object Construction and Thematization/Extracton", *English Linguistics* 22, 56-81.
- Uriagereka, J. (1999) "Multiple Spell-Out", In *Working minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 251-282. Cambridge, Mass.: MIT Press